
風がおもむくままに・・・

kamome23

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風がおもむくままに・・・

【Nコード】

N0498X

【作者名】

kamome23

【あらすじ】

お話の主人公は、趣味が、ミリタリー好きとハッキングというごく普通ではない少年、風芝^{かしは} 恍^{こう}が、体験したその時では、普通なお話・・・

日常が、非日常に。非日常が、日常に。
その中で生きて行っている。人達と、それに巻き込まれた一人の少年のお話。

縁が結ぶドタバタミリタリーストーリー

風がふくころに・・・

2010年 夏

あの蒸し暑いコンクリートの校舎から帰ってエアコンをつけてノートパソコンを開いた。

その行為は自分にとってすでに習慣となっている

それはある人達とのチャットを行う事だ。

明日、十神坂神社の裏山でサバイバルゲームを行う仲間たちとだ。

自分自身サバゲーはたまにやっている。

とはいっても、銃などは、いつも借りている。

なぜ自分が必要とされているのかは簡単なこと、なぜならノートパソコンがあるからだ。

このノートパソコンには、アメリカ海兵隊お墨付きの最新装備でさらに、耐振、耐水、耐塵装備なのだ。

これは、高校入学と同時に、父と母からプレゼントされたものだ。

そんな変なものを送ってくるというのだから、

両親も少し変わった職業で、父は、陸上自衛隊の士官で

母は、防衛相のサイバーテロなんとかというところに勤めてたはず。

両親の仕事のせいで、僕は、変な趣味を持っているということだ。

そんなわけで、僕は、サバゲーで、作戦参謀として活躍している。

そのために、今回召集された。パソコンの電源を落として、明日サバゲーもあるから、早く寝ることにした。

仲間と一緒に、十神坂神社にいった。

十神坂神社は、数百年と歴史もあり、縁結びの神様が祭られている場所だという。

それに神隠しに会つらしいとパソコンで調べた時に書いてあった。

神社の裏手にある山は、この周辺の盆地を一望できる場所にある・・。

「現在の状況を報告しろ」

そんな言葉が、無線からの報告で、現状を確認した。

パソコンの地図表示には、青い点が、様々な場所に散っている。あることに気付いた。

周りに味方が、いないそう思った瞬間パソコンを持って走った。

そうしたら、後方のほうで、B B弾独特の音が、聞こえた。

木が生い茂る中後ろを見ながら走った。

その行動が、自分の人生を変えるなんて想像できなかった。

突然目の前が、青色になった。目の前という表現はおかしい、360度すべてだ。

気づいた時には、時が遅く

「わぁーーーーー」

悲鳴を上げながら、落ちて行った。

そして頭の中が、真っ白になった・・。

「民間人発見！気を失っている。」

「死んでいないだろうな」

「息は、・・・しています」

「なんで民間人がこんなところに」

声が聞こえた。

特に痛いところはなかった。

目を開けてみると。

富士山にアサルトライフルと絶対掛け合わせてはいけない部隊章を付けた。

森林迷彩服を着た。

女の人が、4人立っていた。

よくみると僕と同じぐらいの年齢に見えた。

なんだ、最近は女でもサバゲーをするのかと思った。

「あのー起きたみたいです。」

「えっ本当だ立てますか？」

「ああ大丈夫」

言って砂埃を払って起き上がった。

「君たちは？」

サバゲーをやっている人たちに聞いてみた。

「第13小隊第2分隊だ」

やけになりきってやっているなと思った。

せっかく助けてもらったから、このまま帰り道でも聞くことにした。

「えーと、ありがとうございます。どうやったら、十神坂神社まで戻れますか？」

「馬鹿かあそこには、敵がいるかもしれない。死にたいのか！」

怒鳴られてしまった。

なんだこの人達は、道を聞いているだけなのに、死にたいのかまで言われた。

戦争しているみたいになんて。

そんなことを考えていると、突然銃声音が鳴った。

その時びっくりした。

電動の音ではなく、火薬の音だった。

それに火薬のにおいがした。

なぜそんなことがわかるかというと、父につれられて、訓練をさせられた時に、銃の練習で嗅いだことがある臭いだった。

「くそ、ばれたか撤退するぞ」

いわれて呆然とした。

「あのー逃げますよ」

そして、引つ張られて無理やり走らされた。
未だに何が起きているかがわからなかった。

山を抜けて、森を抜けて、街に出てきた。

そこで見た光景に冷や汗をかいた。

目の前に広がる。

廃墟、一部壊れたビルがあれば、崩れたコンクリートの残骸、すべ
てが違っていた。

そのまま引つ張られ廃墟の中へ入っていった。

わからないままみんなが、座っていた。

「大丈夫か、えーと名前は？」

赤髪で、いかにも楽天的な人に、声をかけられた。

「ああ、自己紹介がまだだったな、第2分隊長の、鳥堂とどう 華蓮かれんだよ
ろしく。」

背中を思いつきり叩かれた。

「名前は、風芝かしば 恍こうといいます。」

完璧には、信じていなかったから名前だけにしておいた。
わからないことが多すぎた。

「風芝だな、わかった。ほらみんなも自己紹介しろ」

鳥堂という人に言われて、

長い金髪をした女の人が出てきた。

「私は、花見坂はなみさか 舞まいよろしく」

一言で終わってしまった。

続いて、

「あのー私は、月三笠 つきみかさ 朝桐 あさぎりといいます。」

長い黒髪のいかにも気品あふれる挨拶をしてきた。

そして最後に、背が高く、さつきからでかい槍みたいなのを持っている人が話しかけてきた。

「城鎧 しろがゐ 灯 あかりよろしく。」

物静かに言ってきた。

「これの他に、あと二名いる。何か質問は？」

質問と聞かれて山ほど言いたいことがあるけど、

「ここはどこ？」

そうすると、懐疑な視線を向けられて、

「何言ってるの、ここは、十神坂市よ」

言われて、よけいわけわからなくなった。

ついさっきまで、僕が住んでいたのは、十神坂市だった。

一瞬悪い夢でも見ているのかと思った。

しかし、今の現状、彼女たちの服装と装備そして、廃墟をみればいくつかな納得できる部分がある。

この状況を仮定して、冷静に考えてみた。

「冷静になって、先入観をすてろ！」

親父の言葉を思い出した。

そして、先入観を捨て

「今の状況と今後の行動わあつ、痛」

舌を噛んでしまった。

鼻で笑いながら

「現在市街地から、他の二名と合流そして小隊長と第1分隊とともに、撤退する。」

「では、ここから走って前方にあるビルまで行くぞ、舌を噛むなよ」

恥ずかしかったが、頬を抑えながらうなづいた。

「了解」

「はい」

「わかった」

などのまちまちに返事をしつつ。

「・・・3・2・1 走れ」

言われたので、走った。

ついた先が廃ビルの一階のロービーらしき所についた。

そこには、二人の女の子が、隠れていた。

「いたいた、被害状況は？」

鳥堂が聞いていた。

そしたら、茶髪で、後ろで髪をまとめている女の子が、

「大変です。第一分隊壊滅、小隊長戦死」

あわてた様子で言ってきた。

鳥堂は考えていた。

その間に、茶髪の子が何か変なものを見るかのようにしてにらんできた。

「えーと、風芝 恍です。さっきこの人達に助けられたんです。」

「その人、崖の下で倒れてた民間人ですよ」

城鎧がフオローしてくれた。

「石内 いしうち 知音 ともねです。」

汚いものでも見るかのような、目で見てきた。

ビルの外から、銀髪の少女が入ってきた。

「敵・・・市街地に入ってきた。だいたい二個小隊」

そして僕の顔を見て

「鈴瀬 茜」
すずせ あかね

一言だけ言ってきた。

「ああ風芝 恍だ」

「まずいな二個小隊か、どのルートで撤退するか」

「このまま市街を抜けて十神坂橋まで行くのはどうかしら」

花見坂が答えた。

「それしかないな。よし全員走り抜けるぞ。」

その後のことはあまり覚えてない。

とにかく走った。息切れや心臓の激しさを気にできないほど・・・

橋を抜けると、小さな拠点があった。

「第13小隊第2分隊帰還しました。」

ちよっとホッとした気分になっていた。

そこで少し休憩していたら

「敵襲」

「応戦しろ」

などの声が聞こえてきた。

そして銃撃音も聞こえてきた。

「固まって応戦しろ」

鳥堂にいわれたので慌てて近くに行つて、

そこで初めて敵を見た。

それは、人であつて人でない者、よく映画に出てくる奴らだった。撃つても撃つても、蘇ってくる・・・

そんなのが第二次世界大戦で使用してそうな、古い銃を持ってこちらに来ていた。

「各自応戦」

耳元で銃声音が鳴り響いた。

そして、知らない間に意識がもうろうつとして来て、一瞬、冷たい風が流れて、

そして気を失ったようだ………

風がふくころに・・・（後書き）

初めての投稿です。

わからないことだらけなので、間違えているところがあったら、教えてください。

タイトルとサブタイトルの「・・・」中は、みなさんが、『これだ』と、思うのを考えてみてください。

修正、加筆しました。

風がうごかすのは・・・

「うえ~~~~ん、ここどこ~~~~」

森の中から聞こえてきたので、いつてみたら、5、6歳の女の子がいた。

「どうしたの」

「迷子になったの」

「よし、じゃあお兄さんが教えてあげる。どこに行きたいの」
いざいつてみてこれは、少し怪しいかなと思ったけど。

「神社に行きたいの」

返事をしてくれた。

そして、神社についた。

「ありがとう、お兄ちゃん」

目を赤くさせてにつこりと笑いながら言った。

お兄ちゃんなんて初めて言われたのでドキツとしてしまった。
いや、自分は、ロリコンじゃないと言いつ聞かせた。

「あのね、私の名前はね、み・・・・」

そのとき、音を遮つたのは、優しい風だった。

「えーと名前もう一回教えて・・・・」聞こうと思ったら
もう走つて行つていた。

その後時々一緒に遊んでいた。

決してロリコンじゃないですから。

名前を聞く機会が何回も、あつたけど、僕は、みーちゃんと呼んでいた。

そしたら反応してくれたので、その名前が定着してしまった。
でも、1年ぐらいたつたら、突然遊びに来なくなつてしまつた・・・

懐かしい夢を見たなと思って

目を開けていると、真っ白いカーテンとベットのの上に寝ていた。

「あら、おきたの」

カーテンを開けて出てきたのは、いかにも男子が喜びそうなプロポーションの白衣の女性だった。

「だいじょうぶかな」

「あ、はい」

「よかった、頭が痛いとか、おなかが痛いとか、」

「はい、大丈夫です。」

「あなたの症状は、心理的ストレスが原因ですね。何か、悪いものでも見た？」

そう聞かれたら思いつくことは一つしかなくて、あのゾンビみたいな奴の事だろう。

しかし、口に出せなかった。

「もしもし、例の民間人、起きましたよ、異常は特に見当たりません。えっ、すぐにそいつを連れてこいですか？どこに、校長室ですネ、はいはい、わかりました」

『ピー』

電子音が聞こえたら、

「あなた校長に呼ばれているわよ、だから一緒に付いてきて」
そう言われたので付いて行くことにした。

しかし、校長ということは、学校って事だけなどといういろいろ考えているうちに

「ついたわよ」

言われて気づいたら

プレートには、しっかりと『校長室』と書かれていた。

「じゃあ、あとは、頑張つてね」

とつと行ってしまった。

一人呆然と突っ立っていたけど、これではだめだと思ってドアをたたいた。

「はい、どうぞ」

気の抜けた返事が返ってきた。

入ってみると、いろいろな資料や本などが散乱していた。

そこに、ピンク色なような紫色のような長い髪の毛の女の人がいた。

「あなたが、救出された民間人ね」

「名前は？」

「風芝 恍です。」

「風芝 恍ね、つとどれどれ」

何やらパソコンを打っていた。

そして急に懐疑的な視線を向けられた。

「あなた・・・十年前に死んでいる」

その時、言葉には、言い表せないほど驚いた。

この良く分からない世界で、自分は、生きていて。

いや、生きていたんだ。じゃあ何でここにいるんだろう。

変な夢でも見ているんじゃないかと思った。

校長と呼ばれる人が電話をかけていた。

「もしもし、民間人が持っていた所持品すべてもってきて」

それだけ言つとすぐに切った。

「ちよつと待つてね」

数分をしたら、誰かが入ってきた。

どっかで、見たことのある人だった。

「民間人の所持品です。あつ君が民間人君だね、よろしく」

急にはいてきて、第一声がそれかよと、突っ込みたかったけど何とか耐えた。

「それでは、失礼します。じゃあ、またあとで、民間人君」

『バタツ』

音がして扉が閉まった。

民間人君て名前じゃないよと言いたかったが、いなくなってしまうた。

「このパソコン・・・」

所持品の中から真っ先にパソコンが取り出された。

そして、納得がいくような顔をして

「あなたもしかして、この世界の出身じゃないでしょ」

“この世界” 確かに落ちた時から、おかしいな、とは思ったけどこの世界ってどういう意味なんだろう。

「これだけの性能のパソコンどこの国でも開発されていない、それにここまで小型なのは、まだないはず、そうこの世界では・・・」

またいった。

“この世界” って、

「それに、あなたが死んでいるはずなのに生きている事などを考えて、仮説を作ると、あなたは、こことは別の世界から来たことになる。」

「どうしてそんなことが言い切れるんですか？」

自分の頭の中で混乱していた。

「だって私も、この世界の人じゃないから」

「えっ」

「あら、その驚いた顔かわいいじゃない、信じられないかもしれないけど、本当だから」

意味が分からなかった。

でも、自然に口から

「・・・はい、わかりました。」

信じることにしてみた。

「信じてくれたんだ。物わকারのいい子好きよ。それじゃあ、確か助けられた部隊は、3機動中隊13遊撃小隊だったね、そこに入っ
てね。あと身分証明書の偽造なんかは、こっちでやつとくから」

「わかりました。しかしどうしてこんなに良くしてくれるんですか。」

「

「私の気まぐれかな。あつまだ、自己紹介していなかったは。私は、
陸軍第2総合学校校長兼陸軍第2総合大隊隊長をしている。木村^{きむら}
逸子^{いっこ}よ。逸子のほうで読んでね、木村^{きむら}って名字意外に多いのよね、
風芝なんて名字珍しくてちょうどいいじゃない。うらやましい。…
…あっこんな時間もういなくなっっちゃ」

一気に入ろんなことを言われた後に、突然言ってきたから気になった。

「どこにですか」

「ちょうどいいや校庭に来て。それじゃ」

「えっ、あの校庭でどこですかー」

『ガチャ』

扉のしまる音が返ってきた。

教えてくれたっていいのと思いつつ、外にでた。

てか、あの校長不用心だな、鍵開けっ放しでいっちゃったよ、

「それにしても、今日一日いやほんの数時間いろんなことがあったな。」

思い解せば、サバゲーから始まり、転落して第13小隊と出会って、ゾンビ見たら気絶して。

そして、懐かしい夢を見て、急に違う世界に来たといわれて、そして校長室に取り残された。

いろいろなことがあったと振り返っていた。

外からは、何かスピーカーでしゃべっている声が聞こえてきた。

そのほうに行ってみたら。

広い更地にでて、たくさんの人と壇上の上には、さっき話していた

校長がいた。

本当に偉い人なんだ

歩いてその方に行こうとした時

話は終わった。

そしたら、空砲が鳴った。

そして、キャンプファイヤーなどで見かける、木を組み立てたものが、ものすごく燃えていた。

きれいだなーと眺めているうちに、周りから泣き声が聞こえてきた。何事かと思っただけで見てみたら、ドックタグを手を持っていた。

ドックタグは、一人一人の部隊名と名前が刻まれていて、常時首にかけていないといけないものだ。

それを手に持っていると言うことは、その人は、ここにはいないということだ。

親父から聞いたことがある。

ドックタグは、その人が、生きている証でたとえ死んだとして、何年も放置されて白骨化しても、ドックタグだけは、残ってその人の証明になると・・・

周りには、それ以外にも何も持っていないくて泣いている人がいた。何も残らないって死んだ人には、何が残るのだろう。

そんなことを考えているうちに、その時ふと、

「物わがりのいい子好きよ」

言われた事を思い出した。

何かが分かったような気がした。

「物わかりなんてよくない、ただ現実だと思っていないんだ。でもここは、ゲームでも漫画でもない、現実なんだ。そして、今僕は、そんな世界にいるんだ。」

全て納得できても、すつきりしなかった。

無性に泣きたいと思った。

でも、泣けなかった。

頭の中では、ずっと空砲の音と泣き声が響いた。

そして・・・

生暖かい風がそつと通り抜けた。

風がうごかすのは・・・（後書き）

1話の続きとして書きました。

ようやく、前座が終わったと思いましたが、

次回は、人物紹介と世界観ということで、まだまだお話に入れませんが、よろしくお願いします。

風がゆげを・・・

校庭にいた人たちが、だんだんといなくなっていた。

いったいどれぐらいここにいたのか、分からなかった。

日も落ちていた。

校庭から、校舎に戻った時に、誰かに話しかけられた。

「あつ、いた。いた。民間人君」

振り向いてみると、校長室に所持品を持ってきた人だった。

「民間人君。探したんだよ」

「民間人君は、やめてください。風芝 恍という名前がありますから」

「ごめん。ごめん。じゃあ、こう君ね。私の名前は、鳴海^{なるみ} 千夏^{ちなつ}よ。伝えたいことがあったんだよ」

いきなり、下の名前で呼ばれた。

「君の所持品は、すべて部屋に持って行ったから、あつ、部屋の場所、兵舎のD連の301号室だから。」

「わかりました。」

「あと、今から確か男子の入浴時間のはずだから、汗流して来たら」

「夕食前なんですネ入浴するの」

「そうだよ」やっぱり訓練と実戦から帰ってくると汗がすごいからね。」

「なるほど」

「じゃあ、行つてきますね」

「あと、お風呂場の場所は、兵舎のA連にあるから。じゃあ、またね」

「ありがとうございました」
しっかりした人だと思った。

兵舎の場所はすぐに見つかった。

4階建ての建物が、7個あった。でも、でも、3つと4つで、分けられてあった。

「えーとA連は、……あった。あった。」

中に入って右のところに、温泉マークがあった。

「ここか、今日はいろいろあったから汗でも流してすっきりしたいよな」

『ガラガラ』

ドアを開けてみると・・・

なじみ深い顔があった。

そう、今日戦場で助けたもらった人たちだ。

あれー確か女の子だったような・・・

目の前には、裸の女性がいた。

相手もこちら側を見ると・・・

「キャー」

叫んでいた。

その後のことは、思い出さたくない、いや思い出せない。
そして気を失った。

一日で何回気を失ったことやら・・・

「あら〜起きたのね〜」

そには、白衣の女性がいた。

「災難だったね。一日に2回も来る人そうそういないわよ」
周りを見渡すと

真っ白いカーテンとベットのの上に寝ていた。

「だいじょうぶ、頭が痛いとか、おなかが痛いとか」

「はい、大丈夫です。」

さつきも同じやり取りしたな

「まあ、だいじょうぶでしょ」

いい加減な人だなと思った。

「あつ、自己紹介まだだったね、私の名前は、鳴海^{なるみ} 千種^{ちぐさ}よ」
「なるみ ちぐさ、あれ確か鳴海でさつきの人同じ名前？」

「あゝそれは、私の妹よ。もう、千夏とあつたんだ」

「えつ、鳴海さんが、妹！」

「姉妹だから、名前で呼んでくれないとわからないわよ」

「すいません。千夏さんが姉ではないんですか」

「違うわよ、私が姉。千夏は、妹。」

「えつ、本当ですか」

「本当だよ」

信じられない。

なんで性格がしっかりしていない方が姉なんだ。

「もう、信じてよ」

暴れだしてしまった。

「はいはい、わかりました。」

「わかってくれたんだ、いい子いい子。」

頭をなでられてしまった。

でも、なんだかいやな気持ちにならない。

その後、体の調子など診てくれた。

「もう、帰っても大丈夫よ、それに早くしないと夕食食べられないよ」

「本当ですか、それじゃあ、ありがとうございます。」

お腹がすいてきたところだった

「もう、ここに来ないように頑張っ
てね。」

「気を付けます。」

『ボタン』

『ボタン』

「あの、食堂ってどこですか？」

「A連よ。」

「ありがとうございます。」

『ボタン』

走った。

さっきの、事件現場のお風呂場とは、逆のほうにあった。
入ってみると、広かった。

「よかった。まだやってた。」

「はいよ！」

お盆をもらって、席に着いた。

夕食は、サバの煮付けに、お漬物とお味噌汁とごはんだった。
意外に普通だなと思った。

食べ終わった後に、部屋に行くことにした。

D連を見つけた。

「301号室、301号室」

三階の階段から一番奥にあった。

『ガチャ』

「おつ、お前が例の勇者か」

6 畳ほどの部屋の中には、チャラそうな人がいた。

「俺が、同じ部屋の斉藤 秀樹だ。よろしくな！」

肩に手を当てられた。

「風芝 恍です。よろしくお願いします。」

「恍な。了解、それよりも、女子風呂強襲は、どうだった。いまま
で、そんなことした奴は、一人もいなかったぞ」

「いや・・・千夏さんに、入るといわれたので、行ったらそうな
ってしまいました。だまされたんですよ」

「千夏さんって、あの声がきれいで美人のオペレーターか」

「たぶん、そう」

「そうそう、今日は、演説とか鎮魂の儀式があったから、時間がず
れたんだ。」

千夏さんって、ぬけてるところがあるんだ。

「鎮魂の儀式って何」

「ああ今回みたいな大規模侵攻での死者を弔うことをさういうんだ
よ、お前は、みたか。空砲を上げたり、火を燃やしたりしたの」

「あー、あれのことか」

「そうそう、それでお前の配属された部隊は、どこだ」

「第3機動中隊第13遊撃小隊だった。確か」

「お前あんなところに配属されたのかよ」

「えっ・・・」

「あそこは、部隊消耗率が一番高くて、地獄への近道の死神小隊で
いわれてるんだぞ。13って、あまりよくない数字だろ。」

「死神小隊・・・」

とんでもない所に、配属されたんだな。

「まあ、死なない程度に頑張ってくれ、しかし、遊撃小隊が一番つ
らいんだよな、いろんなところに行かされて」

「遊撃小隊って何が目的なの？」

「えーと確か、様々な場所に行つてかく乱、誘導したりするはずだった。まあ、俺は、戦車の中にいるんだけどな」

「え、戦車の中？」

「俺の所属は、第3進撃中隊第5機械化総合小隊その中の、74式改の砲手やつてる」

「へー」

その後、雑談で盛り上がった。

「明日、早いからもう寝るは。明日は、5時半おきだぞ」

「えっ5時半・・・」

今まで、7時半おきだったのに、いきなり5時半ってきつくはないですか。

「お休みな」

『ガーゴー、グワアーゴー』

その後すぐにいびきが聞こえた。

「よし、荷物を片付けて、着替えてすぐ寝るか」

すぐに、電気を消して、布団の中に入った。

「もう寝よう。」

目を閉じた。

今日一日いろいろなことがありすぎた。

でも、いろいろなことわかったようなそんな一日だった。

いきなり戦争させられているところに来て。

これからが大変で、どうなっていくのかわからないけど、とりあえず生きていこうと思った。

いびきがうるさくて、ねれない。

そうして、いろんな意味で、寝むれない夜を過ごした・・・

突然ラッパの音が鳴った。

「なんなんだ」

「朝の起床ラッパだ」

「うるさいね」

「もう、慣れた。よし、急いで着替えて飯食いに行くぞ」

「わかった。」

着替えて外に出た。

まだ外は暗かった。

周りを見てみると、同じように出てきている人とがたくさんいた。

「それで先月に・・・」

秀樹が隣でいろいろなことをしゃべっていた。

そうしているうちに食堂についた。

たくさん人がいた。

「早く、早く、こっちだぜ」

今日の朝ごはんは、鮭の塩焼きに、漬物、味噌汁そしてご飯だった。

「いつもこんな感じなの」

「ああそうだな」

ごはんがおいしいだけ、ましなのかなと思った。
食べ終わった。

そして、部屋に戻ってきた

「6時半までに教室に集合だからな。あと、おまえの制服とIDカ

「ド届いてたぜ」

白色とカーキ色の制服だった。

微妙にダサかったけど、機能性を考えれば、いいのかな。

制服に袖を通した。

サイズは、ぴったりだった。

なんでサイズを知っているのか不思議だったが、あの人なら、何でもできそうなので考えるのをやめた。

鏡を見て、どんどん元の世界から遠ざかっていく感じがした。

これから、この世界で生き残ってかないといけないんだ。

「準備できたか、よし行くぞ」

「わかった」

外に出て、校庭を通り抜けたところに校舎があった。

「昨日何回も来たけど、気切してたからな。まともに見ていないや。」

「

「なんか言ったか」

「何も」

よく見てみると。

四階建てで、屋上にはアンテナとレーダーがあった。

校舎の中に入った。

「おまえは、職員室だな、よし、ついてこい」

言われた通りついて行った。

二階をあがってすぐの所にあった。

「斉藤 秀樹です。風芝 恍を、連れてきました。」

『ガチャ』

中は、普通の学校と変わらなかった。

一人の男の先生がこっちに来た。

「君が、風芝 恍君だね。僕の名前は、森井^{もりい} 芳勝^{よしかず}よろしく。」
メガネをかけていて、ほっそりとしていた。

「こちらこそよろしく願います。」

「斉藤君は、教室に行っていていいよ。」

「はい、わかりました。恍またあとでな」

「またあとで」

「僕は、座学担当です。実技担当は、別にいるけどその時に紹介してもらって。」

「わかりました。」

「簡単に部隊の説明をするけど、小隊でいたい15〜20人ぐらいの編成で、3つの分隊に分けます。1つの分隊で、5〜7人です。それで、13小隊は、第一分隊が、2人しかいないため、再編しました。大二分隊と第一分隊を交換して、ちょっと特殊だけど、第一分隊8人、第二、第三分隊を6人編成になりました。新しい人は、明日配属になります。」

「あれ、第一分隊って、生存者いなかったのではありませんか」

「あとから発見されて、2人とも軽症だったんだよ。」

「そうですか」

「小隊長は、鳥堂 華蓮君にやってもらうことになったから」

あの元気な人が

「分隊長は、誰になるんですか」

「まだ決まっていなね、明後日までには、各個人の能力を考えて、決めるよ」

「はい分かりました。」

「それでは、行こうか」

「はい」

職員室を出て、三階に上がって、右のほうに行ったら。

3-13とネームプレートがあった。

「ここが、今日から君の配属されるところだよ。第二総合大隊三機

動中隊十三遊撃小隊によっこそ」

『ガラガラ』

そこには、見慣れない顔があつた。

「ほかの分隊の人かな」

そして・・・なじみ深い顔があつた。

「またあつたな、覗き魔」

「覗きなんて、最低ですわ!」

「変態!痴漢!」

「覗きは、だめですよ」

「覗きは、だめだよ」

「・・・」

『ギロリ』

再会して、最初の言葉がこれだった。

この先どうなるのやら。

生温くて、そして、凍えそうな風が頬に当たった・・・

風がゆげを・・・（後書き）

感想などよろしく願います。

説明が長くてすみません

全然ストーリーに入れていませんね

これから、あとがきで兵器解説していきます。
本日は・・・

「74式改」正式名所74式戦車

現在陸上自衛隊の主力戦車が74式です。

全長 9.41 m

車体長 6.70 m

全幅 3.18 m

全高 2.25 m（標準姿勢）

重量 38 t

懸架方式 油気圧式

速度 53 km/h

行動距離 300 km

主砲 51口径105mmライフル砲L7A1

副武装 74式車載7.62mm機関銃（主砲同軸）

12.7mm重機関銃M2（砲塔上面）

エンジン 三菱10ZF22WT

空冷2ストロークV型10気筒

ターボチャージド・ディーゼル

720 PS / 2,200 rpm

排気量 21,500 cc

乗員 4 名

レーザ測遠機とアナログ弾道計算機による射撃統制装置を初めて

搭載した。

弾種、風速、気温、傾斜角等のデータを手動で入力できる。

砲安定装置によって走行中の射撃も可能。

90式のような照準制御システムは搭載されていないので、砲手の射撃能力や技術によるところが大きい。

74式戦車の最大の特徴は、油気圧懸架方式の姿勢制御システム（上下0・2m、前後+・6度、左右+・9度）である。当時としては画期的なものであり、起伏の激しい日本の地形に合わせ、車体を隠蔽しながら正確な射撃が行えるメリットがあるが、複雑な構造がネックである。

第2世代としてMATO諸国の主力戦車水準をクリアした74式戦車は、流線的なデザインにファンも多い。（[wikipedia参照](#)）

74式改は、それに、照準制御システムによる命中率向上。自動装填化により、乗員を3名に。装甲を強化した。バージョンで、忠実にはないです。

世界の隙間を風が・・・

その時、乾いた笑しかできなかった。

「今日から、第十三小隊に配属された。風芝 恍君だ。懲役免除されていたが、配属になった。わからないことがたくさんあるだろうから、みんな教えてやってくれ。」

「よろしくお願いします。」

拍手も何も起こらなかった。

六人その他の女子の殺気を感じたのか、男子も何も言えなかった。

「よし、挨拶も終わったところで、お前の席は、あそこな」

言われたところは、隣に、鳥堂。前には、花見坂がいた。

他は、空席だった。

「よろしく」

声をかけてみたが、無視された。

「よし、今日の座学は、新しく入った。風芝君のために、いろいろと復習してみよう。」

「こいつ、一人のためにですか」

左前に、いた男子から反論があった。

「佐々木君確かに、そうかもしれないけど、当たり前的事でも、もしもって時には、役に立つよ。」

みんな、今までの戦いを思い出したのか、納得したような顔になった。

「はい」

「みんなも納得してくれたね。よしまず、敵についてだ。名前は、ウイオス正式名称は、Unknown Under Invader Of Seabed」

なるほど、頭文字をとって。

UIIOSか、でもなんで海底の下からの侵略者！？

「ウイオスの本拠地は、太平洋、インド洋そして大西洋にある。アプスーといわれており。海拔5000m以下にあり。ソナーの結果により。複雑な地下構造を持っているほか不明。現代の技術を持って攻略不可能そんなところだね」

攻略不可能って、そんな敵と戦ってるのかよ。

「そして、陸に上がったら、樹海と呼ばれる。基地を作る。樹海は、木が生い茂って。すべて、茶色で葉っぱは生えてなく。火では、燃やす事が出来ない。内部構造は、枝が多く上空から内部の状況がわからない。日本には、東京にある。」

ますます、変な世界に来たんだな。

「日本は、箱根、白河、三國峠そしてここ山梨などで防衛戦を展開している。」

関東平野は、占領されてるんだ。

「次は、敵の詳細について、一番最初に発見されたのは、ムシユフシユ。全長約12m。その肌は、船の装甲を溶かすぐらい強力。海だからあんまり関係ないね。」

全長12mってでかいな。ウミヘビみたいな形。

「他には、ムンム。全長5メートル・針を打ち出して、飛行機などを落としている。」

ハリセンボンみたいな形だな

「次は、エンリル。四足歩行で全長約6m。水陸両用型で、尻尾と強力なあごが武器で、弱点が腹。上陸してくる時に少数確認される。主に狙撃による対処が一番いいとされている。そんなところかな」
「ワニみたいなのかな。」

「最後に陸型。エアバニ。全長約4 m。棍棒が武器。胴体と頭は、固い。弱点は、後頭部と後胴体。接近されなければ、さほど脅威にはならない。」

弱点があるのは、こつちもやりやすい。巨人だな、ケンタロスみたいな感じだな

「意外に厄介なのが、アツハーズ。全長3 m。硫黄弾を打ち出してくる。後方支援型。大規模侵攻の防衛戦において、遊撃小隊が、撃破任務に就くことが多いから。」

四足で、背中に山の頂上みたいな、噴火口の形の穴が開いているから、あそこから硫黄弾をだすのかな
みんな苦い顔をした。

「みんなが、一番遭遇することの多いエキンムだ。詳しい生態などは、分かってないが、第二次世界大戦などの、武器、戦車、飛行機、艦船を使っている。他に、歩兵の屍型もいる。屍型の武器は、いろいろで、銃から、刃物まで確認されている。」

あのゾンビか、思い出ただけで鳥肌が立った。

「基本的なことは、こんなところかな。風芝君わかった」

「はいわかりました。」

「それでは、前回の続きの森林戦において気を付ける事が……
……」

その後は、軍事学の授業だった。
とつてもためになる……かな。

そんなこんなで、お昼になった。

みんな席を立って、どこかに行った。

「あの〜どこで食べれば……」

みんなが無視した。

「食堂でいいですよ」

話しかけてきたのは、物静かそうなメガネをかけた男子だった。

「僕に名前は、服部 進といいます。」

「服部君ありがとう。一緒に行こうか。」

「はい」

食堂についた。

「この食券機で買います。自分のＩＤカードをかざせばいいです。」

「この１００ｐｍとか１２０ｐｍで数字が違っただけだ」

「ああそれは、任務を受けたことに支給されます。ご飯食べる時と、売店で買いたいものを買えます。でも、風芝君任務受けてないんですよね」

「ああ」

『ピイピイ』

「お金が入っている。１００００ｐｍって」

「０一つ間違えてませんか。」

「いや、確かに１００００ｐｍって」

「すごいお金ですよ。」

「あ、そうなの」

まったくあの校長の仕業かな

「まあ、Ａ定食でいいや」

あまりお金を使わないことにした。

後が怖そうだから。

「僕もＡ定食に」

Ａ定食は、不鬱だった。

感想を付けるなら、普通だった。

「この後は、実技で場所が違います。」

「へーそうなんだ」

「たいてい、一日中実技の日が多いですけど、週に一、二回は、座

学があります。」

「場所はどこなのか」

「校舎の裏の実技場です。他にも、狙撃場や、車両実習場なんかあります。」

「意外に広いんだ」

「ここが、最終防衛ラインになっているので、ある程度の広さは必要らしいです。」

歩いているうちに着いた。

他の人は、集まっていた。

「全員集まったか。」

そこには、ごつくて、坊主頭のサングラスかけたマッチョが立っていた。

いかにも、喫茶店を経営していて、海坊主とあだ名がつきそうな人だった。

「お前が、新任の風芝か、みっちりしばいてやるからな名前は、鬼狩だ。」

「はい、よろしくお願いします。」

「それでは、最初に銃の分解だ。」

「了解、教官。」

みんな声をそろえて返事をしていた。

渡された銃は、89式5.56mm小銃だった。

これは、親父の訓練に付き合わされた時に、扱ったことがある。今思うに、青春のほとんどが、親父に奪われていたような・・・

「始め」

思い出しながら、分解してみた。

「風芝、意外に早いな。お前は、初心者と聞いていたけど」

やばいな、ばれないようにしないと。

「入るにあたって、教本を読んできました。」

「いい心がけだな」

ごまかせたかな

「それでは、次は射撃練習だ。」

「はい」

銃声が一気になった。

制限点射だ。

2、3発ごと撃っていく。

アサルトライフルで、連射してみようものなら、命中率は低いし、弾をあつという間に使い切る。

連射は、至近距離での戦闘、弾幕張るときぐらいしか使わない。

「やめ」

「お前意外に当たっているな」

話しかけてきたのは、鳥堂だった。

「それほどでも」

「まあ実力があるやつは、大歓迎だ。」

「あの・・・昨日のこと気にしてないんですか」

思い切って聞いてみることにした。

「そりゃ、気にするさ。でも、私情を戦場には、持っていけないから。分けるところはしっかりしないと。」

分隊長やっている理由がわかったような気がした。

「次は、10キロ走れ」

「はい」

そうして、この世界で初めての訓練は終わった。

前の世界では、散々やったんだけどね・・・

現地解散みたいで、みんな帰っていた。

今日聞いてみて、いろいろ聞きたい事が出来たので、校長に会ってみよう。

『コンコン』

「はーい」

「風芝 恍です。校長に質問があつて。」

「入ってちょうだい」

『ガチャ』

「それから、校長はやめて、年取つてるように見えるから。逸子先生ぐらいにして」

「はい、わかりました。こうちょ…逸子先生」

「それで、聞きたいことは」

「この世界の軍事レベルですね。今日訓練で、前の世界と同じ89式を見ましたから、どこまで同じなのが聞いておきたくて、後々困りますからね」

「わかつたわ、まず陸軍は、前の世界とほとんど変わってない。でも、ミサイルがない」

「ミサイルがない」

「ミサイルというより、ジェットエンジンが開発されてないの。だから、飛行機は全てプロペラ機」

「えっ、そうなんですか」

「そうなの、私もびっくりしたわ。海軍もまだ、戦艦を運用してるし」

「戦艦ですか」

「歴史が少し違うの。主に1942年から」

「歴史が違うんですか」

「1942年にミッドウェーでアメリカ海軍は、ウイオスの襲撃によつて壊滅してるのそして、その後ハワイ諸島、小笠原諸島をウイオスに占拠されて太平洋戦争は、なし崩し的に終戦。ヨーロッパでも同じことがあつて。1943年にイベリコ半島に上陸してきて、1944年にヒトラーの暗殺に成功してるの」

「そんなに変わっているんですね」

「その後ウイオスのために、各地域で連合が作られているの」

「なんか、すごい所に来てしまいましたね」

「そう。だから、頑張って頂戴ね。」

「あと、お金何であんなに入っていたんですか」

「ああそれは、不自由がないようにっていう配慮よ」

「本当ですか」

「本当よ」

「わかりました。それじゃあ、ありがとうございました。質問があったら来ますね。」

「わかったわ」

『ガチャ』

校長室から出たら、窓から隙間風が流れ込んだ。

そんな世界では、どう生きていくのか、これからどんな出会いがあるのかはまだ誰にもわからなし知らない。

でも……何も自分ばかりが特別なわけではない。どんなに苦しくても同じく苦しみを味わっている人がいることを理解しなければなら
ない。

ただ……どの世界でかは、あなた次第です……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0498x/>

風がおもむくままに・・・

2011年10月24日16時00分発行